大変な物識りで、病人があればすぐに飛んで行き、看病したり、田植えや稲刈りで忙がしい時などは、里の子ども達を集めては読み書きを教えたり、一緒になって遊んだりしてくれましたので、子どもたちはもとより里人たちは満開坊、満開坊となれ親しんでいました。

いくら里人が素性や生いたちを尋ねても、

「俺かい、愚坊はなあ、西方浄土の、カビラ城というお城のほとりの生まれだよ。」と、にこにこ笑っていましたので、里の人々は、

「たぶん標葉のお殿様の満開の古城に係りのあるお坊さんではないだろうか。」などと話しあっていました。

その頃、諏訪の神社の西に、一本の桑の木の大木がありました。

ある日、満開坊は、里の人達に集まってもらい、「坊はこのたび生きながら入寂しようと思う。ついては、今生の喜捨として、新しい棺をつくって桑の大木の根もとにおいてくれ。そして坊が入棺したらすぐ釘で蓋をうちつけ、上から土をかけてくれ。

坊は棺の中でお経を読んでいるから、お経の声がきこえなくなったら息を引きとったと思ってもらいたい。」と頼みました。

里人たちは満開坊のたのみのまゝに新しい棺をつくり、桑の大木の根方に大きな穴を掘って運